

Bread Givers―来世への逃避

外国語学部 英語英文学科 4年 小宅 美香

序論

アメリカは果たして本当に「自由の国」なのだろうか。確かに、白人・アフリカ系・中国系・日系など様々な人種が同じ国内でそれぞれの歴史や文化、宗教を背負って生きているアメリカは、世界でも有数の多民族国家である。それだけに人々がアメリカに寄せる希望は計り知れず、古くから移民も多い。

しかしながら、表向きは人種差別を嫌っているように見えるアメリカも、個人レベルでは多くの人種差別がある。異人種間の結婚は3%余りで、白人の66%が、自分の親戚や友人が黒人と結ばれることを嫌う。また白人と比べてヒスパニック系アメリカ人の失業率は2倍、黒人系

アメリカ人は2.5倍である（ホンダ 87）。それでもなお人々がこの国を「自由の国」として愛して止まないのは何故なのだろうか。

アンジア・イージアスカ (Anzia Yezierska, 1885-1970) の Bread Givers (1925) におけるスモリンスキー (Smolinsky) 一家の場合も同様だった。ロシアにおいて、ユダヤ人であるというただそれだけの理由で迫害を受けてきた彼らが助けを求めたのは、アメリカという希望の地だった。

ユダヤ人たちが次々にアメリカにやってきたのは、アメリカにおいてはユダヤに対する制度的なあるいは政府による差別が独立当初から基本的になかったからである（太田 1）。しかしそのアメリカで彼らを待っていたものは希望で

94%は少なからず神は存在すると信じており（花香 1）、71%の人が自らの信じている神のためなら命を捨てても構わないと思っている（Land 2）。

これまで Bread Givers は、ラビとして神に祈りを捧げるだけの毎日を送る父親に悩むサラや母親を通し、男尊女卑のユダヤ人社会に生きる女性の姿が多く考察されてきた。それに加えて本稿では、盲目にユダヤ教を信仰し、いつかは報われると信じて疑わなかった父親にも焦点を当てたい。この父親の言動に見られる異常なまでの宗教心の理由とは一体何なのであろう。果たして何が人を差別へと駆り立てるのだろうか。本来なら、戦争や自爆テロに頼らなくても、自分を卑下したり、他の誰かに跪いたりしなくても暮らしていけるはずなのだ。何故人は人を傷つけ合っただけで生きられないのだろうか。一家と周囲の人々の生活を見つめ、そこで人々を夢中にさせる神への信仰心、そして引き起こり続ける差別について考察していきたい。

I アメリカに求めた栄光

「ユダヤ人」が嫌われた理由とは何だろうか。スモリンスキー一家が逃げ出して来たロシアで

も、ポグロム (pogrom) と呼ばれる大規模なユダヤ人虐殺が1881年以降繰り返し行われた。その残酷さとロシアに対する憎しみは、彼らの会話の中にも顕著に見られる。

安住の地を目指し、ユダヤ人は彷徨い続けて来た。その最後の希望が、アメリカと言う新しく自由な国だったのだ。しかしその地において、彼らの夢と希望は無残にも消え去ってしまった。ここにもロシア皇帝 "Tsar of Russia" (BG 33) は存在したのだ。他でも無いアメリカ国民である。当初一家は、アメリカに絶大な希望を寄せていた。しかしその思いは、これから考察する裁判や欠陥店舗事件を通して、アメリカに対する怒りに変わってしまった。その理由を検証したい。

A 裁判事件

父親が裁判に掛けられた原因は、一家の家賃を女主人が取り立てに来たことにある。未納の家賃のことを気に掛けもせず熱心にトーラー研究に勤しむ父親の姿が、女主人の怒りを買ったのだ。腹を立てた彼女は父親のトーラーを取り返して床に投げつけたのだが、今度は逆にそのことが父親の逆鱗に触れ、彼は彼女の頬を打ったのだった。

は無く、ただ相手の姿が摩り替わっただけの同じ結末だったのだ。一家の末娘であるサラ・スモリンスキー (Sarah Smolinsky) は、仕事に就くことが出来なかったり、彼女の父親であるレブ・スモリンスキー (Reb Smolinsky) に至っては、設備の不完全な店舗を騙し売られたりした。双方ともその理由は「ユダヤ人であるから」である。

このように、希望に胸を膨らませる彼らに対してアメリカは無常にも排他的であった。ロシアでの迫害者が皇帝 "Tsar of Russia" (BG 33) であつたのなら、その後継者はアメリカ国民と言える。アメリカ人たちは固まって集団を作り、自分たちの中で言われていることやされていることを、あたかもそれが常識であると言わんばかりに強要するのである。

それが出来る理由はただひとつ、そこがアメリカだからである。自分が何をしようと味方になってくれるアメリカ人がいるという安心感があるのだ。自分たちは常にマジョリティーであり、だから優位に立てる。流れに反して何かを主張することは容易では無い。逆らう者は全て「異端者」のレッテルを貼られるのである。こうして希望を閉された者が辿り着く先のひとつが宗教、そして神である。実際、アメリカ人の

何故一家は取り立てられるまでに貧しかったのか。その理由は大きく分けてふたつあると考える。まずひとつは、トーラー研究ばかりして働かない父親のせいである。男尊女卑のユダヤ人社会においてラビである父親は誰よりも偉く、妻や娘たちが自分のために働くことは当たり前であると思っている。もうひとつは、ユダヤ人が働くことの出来ない環境にある。まだ子どものサラも必死になって働くこうとするが、働き口は無いに等しい。

そもそも、父親のトーラーを踏みつけた女主人にも非はあったのにも関わらず、裁判が起きたこと自体疑問である。ここで鍵となるのが以下のサラが語る文である。

And Mother was telling him how the butcher and baker and Zalmon the fish-peddler left their work to bail him out. And how they raised the money together for the best American-born lawyer to take his part. (BG 24)

ここから分かることは、ユダヤ人弁護士の手護では法廷において通用しないと言ことである。つまり法廷は全てアメリカ人で取り仕切られていたのだ。ユダヤ人を味方してくれる人な

ど法廷には居ない。アメリカ人が法廷を取り仕切っていたと言う事実は、起訴事実を述べられた上でもなお堂々と"It's a lie"(BG 25)と叫ぶことの出来る女主人の態度に伺える。また、彼女の贅沢な服装や傲慢な態度も、ユダヤ人たちにとっては許し難いものだったに違いない。

B 欠陥店舗

父親が騙し売られた店舗からも、標的がユダヤ人であったことを証明する事実が見て取れる。先ず何よりその物件の記事が、"Ghetto News"(BG 112)のものであったことである。しかもその記事は、"must have cash to-day. (BG 112) & Only the man with ready cash need come. (BG 112)などと、明らかに疑わしい文章で構成されていた。

ここでこの記事に疑惑を持ったのは女たちである。そのため妻は、物件を見に行くという夫に向かい、自分も行くまでは契約をしないように念を押した。男尊女卑のユダヤ人社会において、妻がこの時ほど夫である彼に自分の意見を主張したことは無かったであろう。しかし彼女の主張も虚しく、父親は見事に不当な物件の契約を果たしたのだった。

この差は一体何なのか。言うまでも無く「世

間を知っているか否か」の差であろう。働くことによって社会の実情を知っている女たちは、世間の自分たちユダヤ人に対する目を充分に理解していた。しかしながらラビであることを理由に働かず、仕事を妻と娘たちに任せきりにしていた父親は、世間を知らない上に人を疑うことを知らない。

そのことに加え彼の信仰するユダヤ教は、人を騙していけないことを教えとしており、彼は忠実にそれを守る。この教えこそが、アメリカ人がユダヤ人を狙う最大の理由だったのだ。父親は、これほどにも清い存在である自分がまさか他人に騙されるなどとは夢にも思わないのであろう。実際、詐欺に遭ったことに気づき怒り狂う母親とは全く対照的に彼は落ち着き払っていた。

父親を狙い、騙した男たちは言うまでも無く犯罪者である。しかし父親に落ち度が無かったかと言えば必ずしもそうでは無い。きちんと確認さえすればこのような事態にはならずに済んだ。他人の言葉を鵜呑みにする父親のようなユダヤ人ほど、騙しやすい者は他に居ないだろう。このように、アメリカと言うビジネスの国で暮らしていくには父親は余りにも無知で世間知らず過ぎていたと言える。そこでは父親の思いや

ユダヤ教は一切通用せず、ますます「排他的なアメリカ」のイメージが助長されていくのだった。

C 賃貸物件

トラー研究に没頭する父親を嫌い強引に家出したサラは、つまりはユダヤ人であることを捨てたと言っても過言ではない。自分がユダヤ人であることを確認するためにサラが出来たこと、それは自らのユダヤ性の否定に他ならない(片淵3)。しかしながら今回もまた待ち受けていたものは差別であった。"room-to-let"(BG 157)のサインはあるにも関わらず、いざ訪ねるや"I don't take girls" (BG 157) "No girls" (BG 157)と言う理由で断られてしまう。その中でも最も注目すべきは、やっこのことでセアラに部屋を貸すことを承諾してくれた女家主の台詞である。

I already had an experience with one like you. She took out books from the library. And in the middle of the night, I could see by the crack in the door that she was burning away my gas, reading. (BG 159)

されつつある自国を、差別という卑劣な方法で乗り切ろうとしたのだ、自己の優位を脅かされまいとする彼らは、そうするにやむをしか母国、そして自分自身を守ることが出来なかったのであらう。

II アメリカが恐れたもの

アメリカのすることは全て正しいとでも言うのだろうか。現在でもアメリカは、ジョージ・W・ブッシュ (George Walker Bush, 1946) の掲げる単独行動主義の下、世界の主導権を握らずには居られない国である。自国が他国の上に立つためなら手段を選ばない。アメリカが世界に誇る強さの理由は何なのだろうか。

Iで見えてきたように、アメリカ人は非アメリカ人に対して非情で排他的であった。しかしながらそれと同時に、アメリカ的な考え方を非アメリカ人に対して押し付けようとする行動も見られる。

In America they got no use for Torah learning. In America everybody got to earn his living first. You got two hands and two feet. Why don't you go to work? (BG 48)

I got to sweat for every penny I earn. I'm no greenhorn. I'm no cow you can milk. If you don't want it yet, then good-bye and good luck. (BG 49)

このように、「アメリカでは、アメリカでは」と強調することにより、長女ベッシー・スモリンスキー (Bessie Smolinsky) の恋人でアメリカ人のバレル・バーンSTEIN (Berel Bernstein) は、父親のユダヤ人的な考え方を否定し、アメリカナイズさせようとしている。ユダヤ教信者でしかもラビである父親にとって、トラー信仰を止めるなどと言うことは、容易に受け入れられる要求であるはずがない。それにも関わらず「もしそれが嫌だと言うのならサヨナラだ!」というバレルの考え方は、自己中心的な行動以外の何物でもない。

確かに、「娘が嫁に行って居なくなってしまうたら自分が生活出来なくなるから、それだけの手当てを代わりによこせ」という父親の要求は「普通」では無い。しかしながらそうだからと言って「生活するためには自分で働いて稼ぐ」という行為が「普通」なのかと言うと、決してそうでは無いであらう。バレルにとっては

この考え方こそが差別を助長させてしまう大きな原因の一つであらう。過去に嫌な経験があるからと言い、その後に会おう人を"like you"と一括りにまとめてしまう。セアラが"Look only on me!" (BG 159) と抵抗していたように、全く以ってその人個人を見ようとしなかった。まさに「否定的ステレオタイプ」(Nishida 1)である。いったんステレオタイプを知識として持つと、人間はそれを変容させるより持続するため、解消され難いのだ (Nishida 2)。

例え同じ人物でも、「ユダヤ人」というレッテルがあるだけで、差別の対象となるのだ。上っ面だけで人を判断している証拠である。人の感情とは余りに極端で、本人に都合のいいように出来ている。長い物には巻かれろ、という主義で (西森 1)、「ユダヤ人」差別する相手」という概念が、頭の中に出来上がってしまうのだ。こうした否定的ステレオタイプによって歪曲されながら下された結果、差別が生起する (Nishida 1)。

このように、多くの人がその思いを寄せた希望の国・アメリカの実態は、余りにも悲惨で脆いものだった。WASP (White Anglo Saxon Protestant) 以外を認めようとはしなかったアメリカは、ユダヤ人を始め他民族によって構成

それが「普通」であるかも知れないが、父親にしてみれば「自分の生活費を娘たちが稼ぐ」のが「普通」なのである。

つまり、人はみな「自分のしていること」普通、当たり前」という感覚を持っており、「それにそぐわないこと」普通ではない、異常である」という錯覚に陥ってしまうのである。そのためバレルは、極めつけと言わんばかりに、ベッシーに以下のように論している。

"This is America," Berel Bernstein went on, "where everybody got to look out for themselves." (BG 49)

「これがアメリカなんだ」という押し付けは、相手の感情を逆撫でる意味以外のものを持たないだろう。その証拠に、この言葉を聞いたベッシーは、バレルとの別れを決意している。それだけではない。父親の裁判を引き起こした女主人にも相手の気持ちを無視した台詞が見られる。

"Hear him only! The dirty do-nothing! Go to work yourself! Stop singing prayers! Then you'll have money for rent!" (BG 81)

てきた。しかしそのような日々生きていくこともままならない生活に対して、父親と娘たちの考え方は明らかに相反している。

次女マーシャ・スモリンスキー (Mashah Smolinsky) は、汚い格好で居ることを嫌がり、稼いだ金をドレスやアクセサリーに注ぎ込んで、質素な生活に潤いを求めようとしている。サラは、苦しい経済状況の中でそのように稼いだ金を好き勝手に使う姉を軽蔑しながらも、同時に羨ましく思っている。それでもやはり貧乏でいることをこの上なく嫌っており、いつか必ず「アメリカ人」になって裕福に暮らすことを心に誓う。このように一刻も早く貧困生活から抜け出したいと願う娘たちをなだめるかのよう

I'll be happy and thankful to live in poverty, as long as know that our reward will be complete in Heaven. (BG 21)

これは父親の「逃避」であると言っている。ロシアでのホロコーストやアメリカでの差別により、現実社会に憔悴しきった彼が求めるものは、もはやトーラーの世界、そして天国しか残っていないのであろう。つまり父親にとって

汚い言葉で父親を罵る女主人にとっては、確かに神への祈りなど、働くことと比べたら比べるにも値しない行為であろう。しかし父親にとってはそうではないのである。ここにもふたりの間には大きな錯覚が生じ、そのせいでIAにおいて考察した裁判が起こってしまったと言える。

それにも関わらず、何故彼らはここまでアメリカナイズを強要することが出来たのか。その答えは序論においても述べたように、そこがアメリカだからである。広大な土地を持ち、世界の中心として成り上がったアメリカという国自体とその国民が、バレルや女主人の味方なのだ。ユダヤ人とは所詮アメリカにおいてはdirty immigrants (BG 17) であり、地位も権力も無い。そのような彼らが自分たちに歯向かえるはずが無いという揺るぎ無い自信が、アメリカ人の中にはあった。故に差別の対象はマイノリティである。つまり裏を返せば、マジョリティーである差別者は、群れなければ何も出来ない者の集まりだと言える。一見優位に立っているように見えるアメリカ人ではあるが、本当は誰より脆くて儂い立場なのであろう。

価値観は人それぞれ違う。肌の色や言語が

宗教とは、辛い世の中で生きるための全てであり、自分を保つものなのである。その証拠として、神の存在意義は以下のように述べられている。

In 1880 Dostoyevsky wrote in The Brothers Karamazov that 'If God does not exist, then everything is permissible.' (Land 2)

まさにこの通りであり、これは裏を返せば「神が存在していることにより、世の中の秩序が保たれている」ということではないだろうか。まだ若く、アメリカへの希望を捨てることの出来ない娘たちと違い、彼はもう既になす術の無いことを無意識のうちに悟ってしまっているのだ。この辛い生活も、神が自分に与えてくれた試練であると思えば耐えられないことは無い。理不尽な状況下において、怒りを吸収し鎮めてくれる神を呼ぶことでやっと自分を保つことが出来るのだ。

神とは何と都合のいい存在なのであろうか。辛い時にはその怒りをぶつけ神の存在を肯定するが、同時に否定することも可能である。例えばサラは、どうすることも出来ない母親の死を「神様なんて居なかったんだ」と自分に言い聞

違っていて当たり前であり、全てが自分と同じ人間はこの地球上にまたと居ない。誰が偉い訳でもなければ、誰が劣っている訳でもない。「ここはアメリカなのだから、アメリカに従え!」ではなくて、互いに互いを尊重して歩み寄ることが必要なのだ。「自分が普通」という錯覚を捨て、「相手が普通」と思えるくらいの心の余裕を持って接することで、今まで見えてこなかった部分が見えてくるのではないか。

III 現実逃避

この世に神は存在するのだろうか。アメリカは、自他共に認める宗教社会であろう。6人が1人が宗教を「非常に重要である」と据えている (Land 1)。何故ここまで神のために全てを捧げることが出来るのだろうか。 Bread Giversにおける父親の場合も同様である。敬虔なユダヤ教信者である彼は、トーラーの教えに導かれるままに生きている。一体、人はどのような状況において神の存在を見出そうとするのだろうか。

IAにおいて、ユダヤ人たちがアメリカで慎ましい生活を送らなければならない一因として、アメリカ人の排他的な性格があることを見

かせて嘆いた。自分を納得させ自己解決を図ろうとしたのだらう。そうすることでしか母親の死という現実を受け入れることは出来ないのだ。

きっと神が存在しないかも知れないことを私たちは気づいているのだらう。現実はその甘いものではないし、現に迫害を受けてきたユダヤ人たちを神は救ってはくれなかった。何より、父親や私たちが「神様、助けて下さい」と頼む相手は「神」という名があるだけで、姿形がある訳でもない。言わば、自分の中だけの偶像に祈っているだけなのだ。神の存在を自分なりに解釈することで、この世界は成り立っているのではないだろうか。

結論

"Bread Givers"とは何なのか。最後に、結論としてその意味を考えたい。一般的には「パンをくれる人」と訳されているであろう。「パン」とはもちろん「生きるための糧」であり、「生命を維持するもの」というのが本義である。生きていくために、人は食を満たさなくてはならない。しかし体力的に満たされるだけでは私たちは生きていくことが出来ない。精神的に支え、

安らぎを与えてくれる「心のパン」が必要なのだ。

父親にとってはトラー信仰である「心のパン」は、サラにとってはアメリカナイズされることであり、マーシャにとってはお洒落をすることであった。このように、人それぞれ違った「生きがい」があり、それに頼って生きている。だから他人に文句を言う権利も無いし、誰が正しい訳でも間違っている訳でもない。ひとりひとり違うということこそが「当たり前」なのである。

それにも関わらず、ひとつの人種、ひとつの言語、ひとつの宗教に一本化しようとすることが間違いのだ。それぞれが自己を主張し続けているのは、差別や迫害、そして戦争が起こるってしまうのもっともであるう。自分だけが正しいとは思ってはいけないし、そうかと言って自分だけが妥協していると卑屈になってもいけない。

1951年、サンフランシスコ講和会議において、敗戦国である日本の処理がなされた時、フィリピンのロムロ代表は、以下のように述べた。

あなたがたが我々に与えた傷は、どんな黄金やこの世のものをもってしても、元に戻せる

ものではない。しかし、運命は我々を隣人にした。我々は共に平和に生きるほかはない。そのためには我々が許しと友情の手を差し伸べる前に、日本には心からの悔恨と生まれ変わる証拠を示して欲しい。〔吉田茂〕²⁾

ソビエト連邦や東欧諸国など、日本の復帰を認めようしない国もあった中、日本に最も搾取されたであろう国の一つであるフィリピンの代表が、日本に救いの手を差し伸べた瞬間であった。この言葉によって現在の日本は生かされている。

世界は犠牲の上に成り立つ。過去を全て許し、今すぐリセットをすることは不可能かもしれないが、過去に囚われたまま少しでも歩み寄ることをしなければ、世界平和が訪れることは永遠に無いであろう。サラがアメリカに拒否された当時のまま、アメリカは、そして世界はまた同じ過ちを繰り返すのか。

ひとりひとりが、もう少しだけ自己主張を抑えて相手のことを気遣い、悪いものは悪いと言う勇氣を持つことが出来たのなら、サラは自分がユダヤ人であるということにもっと誇りを持てたはずである。アメリカナイズしようとは思わないで済んだであろうし、父親も心無い差別

に苦しまずに済んだ。今からでも遅くは無い。第二のサラや父親をこれ以上増やさないためにも、わたしたちはただ傍観することを止め、行動しなければならぬのだ。

注

1 Bread GiversのテキストはPersea版を使用。以下本書はBGと略記し、ページ数によって記す。邦訳は、全て拙訳。

◆引用文献

- ・花香公寿ABOUT USA 2 Dec.2006
<http://www.kokugai.com/zakki_christ.html>
- ・ホンダ・R
『アメリカの正体がわかる絵本！
The Bold Eagles strikes again』
東京 講談社 2003
- ・片淵悦久
『Americanerinの幻想—The Bread Givers—ユダヤ系女性作家Anzia Yezaeskaの沈黙—』
7 July 2006. <<http://www.let.osaka-u.ac.jp/eibe/olr-40-nobuhisa-katafuchi.pdf>>

・亀井秀雄

『ナショナリティの問題』29 May 2006

<http://homepage2.nifty.com/k-sekirei/dojida/history_2_13.html>

・Land, Richard How religion defines America 29 May 2006

<<http://news.bbc.co.uk/2/hi/programmes/twlgod/3518221.stm>>

・Nishida, Tomohiro TERMINAL 24 April 2006.

<<http://www2.ocn.ne.jp/~terminal/discrimination.htm>>

・西森マリー

『映画「紳士協定」でみる近代アメリカのユダヤ人差別』29 May 2006
<<http://www.eigotown.com/index.shtml>>

・太田述正

『米国ユダヤ人』27 June 2006
<<http://www.ohatan.net/column/200409/20040928.html>>

・竹内明彦

『ポスト・サビオ ムック ニュースがすべてに分かる世界地図』東京 小学館 2004
Yezaeska, Anzia. Bread Givers. 1925; New York: Persea Books, Inc., 2003
『吉田茂とサンフランシスコ平和条約』